

加藤泉「人へ」

2007年7月14日(土) - 8月11日(土)

アラタニウラノ
ARATANIURANO

〒104-0041
東京都中央区新富2-2-5
新富二丁目ビル3A
3A 2-2-5 Shintomi Chuo-ku
Tokyo 104-0041 Japan
Tel +81-(0)3-3555-0696
Fax +81-(0)3-3555-0697
info@arataniurano.com
www.arataniurano.com

緑眩しい季節、皆様におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

このたび、私ども荒谷智子と浦野むつみは、荒谷は株式会社タウンアート、浦野は株式会社白石コンテンツポラリーアートを円満退職し、中央区新富に、ARATANIURANO(アラタニウラノ)として、新しくギャラリーを開業する運びとなりました。

こけら落としとなる、記念すべき第一回目の展覧会として、7月14日から8月11日まで、加藤泉の新作個展「人へ」を開催致します。本年のヴェネツィア・ビエンナーレ国際企画展に招待作家として参加する等、益々の活躍が期待される作家、加藤泉の最新作に是非ご期待ください。

つきましては、本展覧会の広報に御協力賜りたく、ここにご案内申し上げます。

1969年島根県生まれ。武蔵野美術大学で油絵を学び、卒業後、数年のブランクを経て画家としてのキャリアをスタートした加藤泉は、一貫して「生きもの」を描いてきました。その始まりは、胎児とも昆虫ともつかないような原初の生命体のようでもあり、その後、その生き物は「絵と私の関係が対等であり、かつ、私にとって新鮮であるよう、持っているものすべてを使って、最善をつくすのです」と加藤が言うように、加藤と絵との相互作用によって、キャンバスの中でゆっくりと育てられ、形を整え、変態し、羊水をまとったような「人のかたち」を帯び始め、時に境界線のはっきりしない不安定な色彩の中から、時に眩しい程鮮やかな色彩の中から現れ、不気味さ、愛らしさ、空虚さ、暴力性、様々なものを感じさせながらも、その「存在そのもの」としか言い様のない、「強烈な何か」を観る者に投げかけてきました。

一方で、その絵画作品を補完するような形で、木彫作品も併行して手がけるようになり、「lonely planet 孤独な惑星」展(水戸芸術館現代美術センター/2004年)及び「Little Boy: 現代のポップカルチャー」展(ジャパンソサエティー・ギャラリー、ニューヨーク/2005年)で発表した、巨大な頭部をたずさえ、不安定にも立ち上がろうとする、巨大化した赤子のような彫刻作品は、プリミティヴ・アートのような直接性を持ちながらも、そこにも収まらない存在感を放ち、今でも鮮烈な印象を残す加藤の代表作となっています。

本展覧会のタイトル「人へ」について、加藤は、「大きな話で、アートは人間のためにあるだろうし、人間が勝手にやってることだし、僕は人間だし、人間に興味があるし、まだ人間に期待してるし。僕は人間というくくりに対して手紙を書いているようなものかな?」と言います。だからこそ、あの生きものたちが、どこか愛らしく、また写し鏡のように見る者を捉え、人間の本質的な存在そのものを直感させるのでしょう。2年ぶりの個展となる本展では、加藤がじっくりと育ててきたその「生きもの」「人のかたち」が、はっきりとした輪郭線によって描き/彫り出されます。

第52回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際企画展「Think with the Senses - Feel with the Mind : Art in the Present Tense」に招待作家として参加する等、国際的にも益々注目が高まる加藤泉の最新作に是非ご期待ください。



1